永瀬由衣

JOSHIBI no.197

永瀬由衣（ながせ・ゆい）

アートディレクター。女子美術大学アート・デザイン表現学科ファッションテキスタイル表現領域卒業。在学中にグラフィックデザインの道を志し、アートディレクター千原徹也氏が率いる株式会社れもんらいふなどでインターンシップを経験。卒業後、同社にグラフィックデザイナーとして入社。2016年にSHE IS SUMMER「LOVELY FRUSTRATION E.P.」で、自身にとって初となるアートディレクションを担当。2022年、独立し、株式会社Baby Octopusを設立。CDジャケット、広告、空間ディレクションなど、ジャンルを問わず活動中。

アートディレクターの仕事は、いろんな夢が叶う宝物。

オリジナリティに満ちたガーリーな作風で注目を集める アートディレクター、永瀬由衣さん。2022年には独立を果たし、自身のクリエイティブオフィスをスタートしました。永瀬さんのこれまでの足取りと、この仕事にかける思いに迫ります。

Photo 久野美怜　Text 株式会社フリッジ

幼い頃はいつも絵を描いていて、小学生のときは漫画家に憧れていました。これが中学生になるとファッションへと、興味の対象が変わります。そんな私が女子美を志望したきっかけは、高校の先生から勧められたこと。小学生の頃からアーティストのYUKIさんの大ファンで「YUKIさんの衣装をデザインしたい」と語っていた私に「衣装のデザインに携わりたいなら、美大に進むのはどう?」とアドバイスをくれたのです。

ファッションデザイナーを志して女子美に進んだのはいいものの、大学1年次には私の関心はグラフィックデザインに向かいます。きっかけは女子美の卒業生である野田凪さんや吉田ユニさんの作品との出会いでした。なかでもYUKIさんのCDジャケットを手がけていた野田さんを知ったときは「こんな形でYUKIさんと関われるのか!」と興奮しました。野田さんは知れば知るほど衝撃的で、アートディレクターなのに衣装のデザインをしたり、洋服のブランドを起ち上げたり、アパレル関係の広告を手がけたりと、幅広くファッションにも携わっていたのです。このとき「こんな風にファッションに携われるアートディレクションって面白そう!」ととてもワクワクしました。片やファッションデザインについては、洋服のパターンメイキングが大の苦手で……。同級生たちが自在に洋服を仕上げているかたわらで、私は立体物をうまく作れずにいました。それでもファッションと接点を持ち続ける手としてアートディレクターという職業はとても魅力的に映ったわけです。

ただ入学した以上は、ファッションはファッションできちんと学んでおきたかった。ならばファッションテキスタイル表現領域に所属したまま、どこかでグラフィックデザインを学べないか。そんな思いから探し始めたのが、デザイナーさんの元でのインターンシップです。運良く、アートディレクターの千原徹也さんが率いる株式会社れもんらいふでのインターンシップの機会を得ることができました。ここでは、資料探しをしたり、撮影資材の買い出しをしたり、荷物の届けものをしたりと、主な役目は雑用です。デザイナーらしい仕事はなかったのですがプロの制作現場に身を置き、グラフィックデザインの仕事に関われるだけで嬉しかったですね。当時、千原さんの仕事を目の当たりにして「絶対にアートディレクターになる」という気持ちはますます強くなっていました。この頃には、ファッションテキスタイル表現領域の先生たちにも自分の意思を伝えていましたが、先生たちはそんな私を温かく見守ってくださいました。学科の枠にとらわれず自由に学べる寛容さがあることも女子美の良さでしょう。そもそもファッションとグラフィックでジャンルは違っても、ものづくりのプロセスには共通する部分があります。例えば手を動かして実制作をする前に、コンセプトを固めること。その重要性も女子美で叩き込まれたことのひとつです。極

めつけは卒業制作のとき。何度コンセプトを練り直しても、担当の眞田岳彦先生からゴーサインがもらえず、実制作にコマを進められずにいました。眞田先生はその点では本当にシビアでした。現在でもコンセプトづくりを大切にしているのは女子美での学びがあってこそです。

思えば、在学中に自主的なファッションショーの企画・運営に携わっていたこともいい経験になりました。コンセプトを定める。衣装を決める。空間の演出を行う。いろんな人を巻き込み、個々の強みを活かしながら魅力的なショーにまとめる。こういったプロセスは、現在の仕事にもよく似ています。私自身、ひとりで黙々と打ち込むより、人と関わりながら制作にすることに関心が向かったのも、チームでの制作経験があったからだと思います。

れもんらいふへ新卒入社できたことは本当に運が良かったのですが、いざ社員として働き始めるとインターンシップのときとは要求レベルが段違い。最初はとても苦労しました。仕事が楽しくなり始めたのはクライアントや制作パートナーとのやり取りを任せてもらえるようになった2年目以降です。私は人との関係性を通じて、仕事の面白さを実感するタイプなのでしょう。千原さんが手がけるプロジェクトのアシスタントを務める日々を経て、アートディレクションを担う機会が巡ってきたのは正社員になって3年目。あまりにも突然でした。きっかけはバンド「ふぇのたす」のCDジャケットの制作に携わったこと。そのメンバーだったMICOさんがソロ活動「SHE IS SUMMER」を始める際に、千原さんのもとにアートディレクションの依頼がありました。ここで千原さんは「SHE IS SUMMER という名前からして、女性デザイナーが担当したほうがいい。ゆいゆいがやったら?」と言うのです。さらに「ゆいゆいとできるなら嬉しい」とMICOさん。私は「いいんですか?」と驚きながらも、任せてもらえる嬉しさが勝りました。初めてのアーティスト写真ではフォトグラファー、ヘアメイク、スタイリストまで全員女性で、不慣れながらもチーム膝詰めでコンセプトを練り、夢中でやり遂げました。最終作までの5年間のなかでも、CDジャケットとして初回に手がけた「LOVELY FRASTRATION E.P.」は、今見ても特に愛おしい、まさに思い出の

作品です。MICOさんとは好きなものやルーツが近いのでやりとりしていて本当に楽しかった。初めてのアートディクションとあって模索続きで、少なからず失敗もしましたが、この経験がアートディレクターとしての忘れがたい第一歩になりました。

アートディレクターとして経験を積むごとに自問するのが「自分のスタイルとは何か」です。未だに答えは見つかっていません。スタイルを確立しているデザイナーの方々には感心する一方で感じるのは、クライアントの魅力を輝かせる表現を探ることの大切さです。これを自身の役目と心得ながらも、自分らしさも「スパイス」として加えたい。常にそのバランスを模索しています。最近では「永瀬さんの世界観が好き」というお声をいただくことが増えました。知らず知らずのうちに自分のスタイルが定まりつつあるのかもしれません。同時に、それにしばられず未知の表現を追求し続けたい。何かのまねではなくオンリーワンに取り組みたい。日々そんな姿勢で取り組んでいます。

2022年にはアートディレクターとして独立し、Baby Octopusという会社を立ち上げました。次なる目標は、会社や自分の活動を少しずつ社会に発信していくことです。そのひとつとして会社のお披露目を兼ねた「Baby Octopus展」の開催を予定しています。ほかにも、大好きなぬいぐるみのブランド展開や、水族館のブランディングも行いたい。ファッションブランドの起ち上げにも興味があります。もちろん憧れのYUKIさんと一緒に仕事をすることも夢のひとつです。私にとってこの仕事は、幼い頃から憧れてきたさまざまな夢を叶えられる、宝物のような仕事だと思っています。アートディレクターが活躍できるフィールドは年々広がり続けています。私自身もこの職業が持つ大きな可能性を前にして、胸を膨らませています。

SHE IS SUMMER 1st Album「WATER」CDジャケット

のん「NON KAIWA FES Vol.2」告知ポスター

日向坂46 1st Full Album「ひなたざか」CDジャケット

Red Velvet Japan 1st Full Album「Bloom」CDジャケット

MESSAGE

新入生に向けて

03

学校法人女子美術大学
理事長　福下 雄二

新入生の皆様、ご入学おめでとうございます。心からお慶びと歓迎を申し上げます。

本学は、2年後の2025年には創立125周年を迎える、私立の美術大学としては最も古い歴史と伝統を誇る大学であり、創立以来「芸術による女性の自立」という建学の精神の下、女性のための美術教育にまい進し、あらゆる世界で活躍する数多くの卒業生を輩出してまいりました。

その歴史と伝統を、これからは、皆様の力によって一層輝かしいものに築き上げていっていただくことを期待しております。

皆様は、これからそれぞれの学科や専攻領域において研鑽を積まれ、専門の知識や技能を学ばれ、芸術を創造していく力を身につけられることと思いますが、同時に、これからの学生生活では、人と人との出会いやご縁を大切に、良き友人に恵まれ、良き先生に巡り会えるよう努力していただき、豊かで充実した学生生活を送っていただきたいと思います。

女子美術大学
女子美術大学短期大学部
学長　小倉 文子

新入生の皆様、ご入学おめでとうございます。1900年に創立した女子美は〝芸術による女性の自立〟〝女性の社会的地位の向上〟〝専門の技術家・美術教師の養成〟を建学の精神として創立いました。賢母良妻の考えが主流だった当時の女子教育の中にあって革新的な学校の登場でした。この精神は現在まで受け継がれ、多くのアーティストやデザイナーを輩出してきました。また、起業する卒業生も多く、職種も多岐にわたります。考える力、生きる力を身に付け活躍の場を広げた結果といえます。

学生生活は学科専攻領域を越えて自由に参加できる産官学連携プロジェクトや異分野と協働で行うプロジェクトが多数あります。また、海外で行うインターンシップや留学制度なども充実しています。行動することでたくさんのモノと出会い、たくさんの人とつながります。正課授業で習得する知識や技術に加え、正課外のプロジェクトに参加することで出会うモノやコトを最大限活用し、社会とつながり、学科を越えた仲間たちとともに体験を通して成果を上げられることを期待しています。

短期大学部部長
佐藤 真澄

芸術学部長
清水 美三子

大学院美術研究科長
奥山 亜喜子

副学長
後藤 浩介

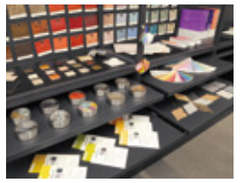
副学長
松本 博子

2023年4月、共創デザイン学科スタート

この度、女子美術大学は芸術学部に「共創デザイン学科」を新設しました。新しい価値の創造には、自ら問いを立て、その問いに答えを出していく自問自答のプロセスと多様な他者を巻き込み、共に構想し、共に成長しながら目標に導いていく「共創型リーダーシップ」を備えた人材が欠かせません。女性に特化した芸術教育に120年以上にわたって取り組んできた本学は、その強みと知見を最大限に活かし、今、そしてこれからの時代に求められる人材を養成するべく新たな学びの場を設立しました。

創造力の基礎となるデザイン教育。その上で多様な領域の人々と共創するための「共創教育」。そして、さまざまなライフイベントも乗り越える折れない心を育成する「ライフマネジメント教育」を行い、これらを応用して、ビジネスの現場で生きる力を身につける「産官学連携による実学」に取り組みます。これらの3つの特徴的な教育により、学生一人ひとりに「共創型リーダーシップ」を育んでいきます。

杉並キャンパス1号館別棟として新校舎も完成しました。授業やプロジェクトに合わせて自由に空間を作り替えることのできる可動式のテーブルやホワイトボードがある共創空間や、様々なマテリアルサンプルが並ぶ「CMF Library」や「Photo shooting area」などから構成されるCreative Laboを完備し、学生の自由なアイデア創発を可能にします。



共創デザイン学科WEBサイト
https://co-lab.joshibi.net/

新任教員からみなさんへ

02

田中理恵子
Rieko Tanaka

芸術学部
教養
特任准教授

文化人類学者。研究地域はキューバ、韓国＋日本。音楽大学を卒業、民間会社で勤務後、文化人類学へ転向。東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了。博士(学術)。キューバ国立芸術大学客員研究員、東京大学学術研究員などを経て現職。2020年東京大学而立賞。多文化共生プロジェクトAJIA-CO代表。著書に『生きている音楽：キューバ芸術音楽の民族誌』など。

音楽やものづくりといった創作と、日常とのつながりについて調査・研究をしています。また社会活動では、「他者」と向き合ってきた文化人類学のアプローチを活かして、多文化理解に関わるプロジェクトに取り組んでいます。国際社会のなかで「自己」を確立し、他者と「共生」する社会をつくる。そんな言葉をどこかで耳にしたことがあることでしょう。しかし「わたし」（自己）を確立するというのは、ある意味で幻想です。そもそも「わたし」は他の種族、約600兆個といわれる体内の細菌たちと共生しているのですから。そんなたくさんの「他者」を想像しながら、一見些細な日常に目を向けてみると、そこには世界が見えてくるはず。一緒に思考の旅に出かけませんか？

宗像花草
Kaya Munakata

芸術学部
教養
特任准教授

1979年神奈川県生まれ。2009年コロンビア大学ティーチャーズカレッジ英語教授法修士課程修了。2021年よりグラスゴー大学教育学博士課程所属。現在の研究分野は、「コミュニケーションツールとしてのアート」、「対話型アート鑑賞手法による英語教育」と「若者と美術館」。神田外語大学外国語学部英米語学科語学専任講師、青山学院大学法学部非常勤講師などを経て現職。東京国立近代美術館対話型鑑賞プログラム（英語）ファシリテーター。

皆さんは、アートと言葉の共通の役割として、どんなことを挙げますか？ 私は、「伝える」ことが一つの大きな共通点だと考えます。言葉とコミュニケーションを研究している私は、アートを学ぶ皆さんと共に、伝えることの意義や難しさを共有する同志として、刺激を与え合い、励まし合いながら、学んでいきたいと思います。私の経験では、言葉を学び使えるようになると、自身の経験がぐんぐんと広がっていきます。そして、新しいことへの興味や違いへの寛容な心をもつことができるようになりました。皆さんが、日本国内外の幅広い文脈で、さまざまな人々と交流しながら、アートやその他のシーンでご活躍できるよう、言葉とコミュニケーションの面でサポートしてまいります。

高橋智子
Tomoko Takahashi

芸術学部
美術学科
美術教育専攻
特任准教授

山形県生まれ。筑波大学大学院教育研究科スクールリーダーシップ開発専攻修了。東邦大学理学部非常勤講師などを経て現職。小・中・高等学校をフィールドに心理教育の実践・研究を行っている。

人と気軽に対面で会うことができる日常やようやく戻ってきました。人や作品に出会うことは，新たな自分に出会えるきっかけになるかもしれません。また，それぞれの専門分野に関わることはもちろんですが，それ以外にも幅広いことに挑戦してほしいと思います。専門性を高める上で，自分には，関係がない，必要がないと思っていたことでも，実は専門分野と，深くつながっていたり，関連しているということがあるかもしれません。また学生時代に経験したことが，後々になって自分を助けてくれることもあります。授業やさまざまな活動を通じて，みなさんと一緒に学んでいけることを楽しみにしています。

中村あす香
Asuka Nakamura

芸術学部
デザイン・工芸学科
ヴィジュアルデザイン専攻
特任准教授

東京生まれ。女子美術大学芸術学部デザイン科造形計画専攻卒業。デザイン会社勤務を経て、現代アートギャラリー「Gallery A」を主宰。国内外アーティストの展覧会プロデュース、アートディレクションを行う。

学生のみなさんが好きなことを研究している時の凛々しい姿、柔軟な感性、吸収力。私はその眩しさに圧倒され、未来を切り拓く美しいエネルギーを感じています。私たちは今、変化に揺らぐ環境と、瞬時に情報が行き交うグローバルな時代に生きています。これからは、AIにはないユニークな発想や多様化に向けた新しい視点が求められ「アートとデザイン」は、ますます重要な学びとなるでしょう。チャレンジにこそ自由は存在します。現実を直視し、美やアイデアを生み出すことに勇気と自信を持ち続けてください。仲間との対話や切磋琢磨したかけがえのない経験は、これから先の自分をずっと支えてくれます。未知の可能性を出発点に、物事の本質に触れる大切な4年間を一緒に探求していきましょう。

紺野弘通
Hiromichi Konno

芸術学部
デザイン・工芸学科
プロダクトデザイン専攻
特任教授

日本とスウェーデンでプロダクトデザインを学び、Ross Lovegroveのアシスタントデザイナーとして3年間活動したのちにHiromichi Konno design studioを開設する。国内外の企業とプロジェクトを行い、製品デザインやコンセプトデザインの開発に携わり、Fritz HansenのRINチェアやGeorg JensenのカードホルダーSkagenの腕時計シリーズなどを発表する。グッドデザイン賞やキッズデザイン賞、Red Dot Design Awardなどを受賞している。

これからは、今までと少し視点を変えて生活してみてください。何気ないことでも見え方や感じ方に変化が生じたら、そこに気づきがあるかもしれません。それが創作のきっかけやヒントになることもあります。ある日、インテリアデザインを専攻する学生が、蕎麦屋でアルバイトをすることは無駄ではないかと相談してきました。設計事務所で経験を積む方が良いと考えたようです。彼は、客と店員、デザイナー、立場の異なる三つの視点から蕎麦屋を見ることができるので、店舗の問題を多角的に洗い出して、その改善案を反映させたインテリアの設計に取り組むことを提案しました。その後、彼は仕事中の意識が変わったと話していました。みなさんも「無駄かな?」と思うことがあっても先ずは視点を変えて行動してみてください。意識が変わると景色も変わります。その変化を楽しみましょう。

佐藤暁子
Akiko Sato

芸術学部
アート・デザイン表現学科
メディア表現領域
特任准教授

女子美術大学デザイン科卒業。CGデザイナー、女子美術大学メディアアート学科助手を経て東京大学生産技術研究所特任研究員。アートとデザインで科学と社会を繋ぐ活動を行う。一般社団法人芸術科学会理事。科学技術団体連合主催・第9回 科学技術の「美」パネル展 優秀賞受賞など。

みなさん、美術館で何を見ますか?きっと作品ですね。その作品の脇にあるキャプションを見ますか?あなたは、そのキャプションを見て、作品のタイトルや素材を確認します。情報を得たあなたは、加えてキャプションそのものを見るでしょうか?そのキャプションは、四角い白い紙に黒い文字で印刷され、数ミリの厚いハレパネに貼られています。さて、その大きさや縦横比は本当にこれでいいのでしょうか?フォントはこれがベストでしょうか?そもそも、四角である必要があるのでしょうか?言うまでもなく、キャプションを注意深く見ることを求めているのではありません。あなたの創造力を成長させ続けるために、あらゆるものを意識し、時には疑問を持って見て欲しいと思っています。そして美しいキャプションに出会ったらその時は素直に感動しましょう。

photo:Takako Arima

西山景子
Keiko Nishiyama

芸術学部
アート・デザイン表現学科
ファッションテキスタイル表現領域
特任准教授

女子美術大学ファッション造形学科卒業。2010年に渡英、セントラルセントマーチンズ準修士卒業後、2013年ロンドンカレッジオブファッション大学院卒業。2014年ロンドン・ファッションスカウト若手支援・ワンストゥーウォッチショー受賞。日本帰国後、フェイラージャパン勤務。2021年自身のブランドの実店舗をオープン。

みなさんは、きっと感性に長けていて、それを元に物を作る事が得意で、女子美へ勉強に来たと思います。目に見えるビジュアル的な物だけでなく、「何でだろう、不思議だな、面白いな」と感じる、事、文化、歴史など、世の中に溢れる様々な事柄を発見することや、すごく惹かれるものへの好奇心と好きなものへの追求心を大切にしてください。それが、デザインやアートに繋がって行き、そこからその思いや疑問を、「どうやって形で表現するか」が重要になります。デザインや芸術に正解はありません。アートやデザインは、人に伝えるための手段です。みなさんは、今考えている事、気持ちや、面白いと思ったものを、どうやったら自分のフィルターを通して、伝えることが出来ますか?

新任教員からみなさんへ

03

潘逸舟
Ishu Han

芸術学部
アート・デザイン表現学科
アートプロデュース表現領域
特任講師

1987年上海市生まれ。東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修了。自らの身体を軸に「土地と人間」「社会と個」の関係性を巡る作品を発表。近年の主な展覧会に「国際芸術祭あいち 2022」(愛知、2022年)、「ぎこちない会話への対応策一第三波フェミニズムの視点で」(金沢21世紀美術館、2021年)などがある。2020年日産アートアワードグランプリ受賞。

美術史の中には、たくさんの自画像があります。笑顔な自画像もあれば、悲しみや苦しみに満ちた自画像もあります。あるいは他人になった自画像や自分自身が登場しない自画像、他の生き物や綺麗な植物になったような自画像もあるでしょう。美術家たちはなぜ自画像を残すのでしょうか。長い表現人生の中で自分自身を見つめ、描くことにはどんな意味があるのでしょうか。この絶えず変化し続ける世界の中で、たとえ世界がどんなに変わっても、この自分の存在から完全に離れることはできないがゆえに、自分自身を見つめることは変化し続ける世界を見つめることでもあるのかもしれません。 大学生活の中で、多様な場所と時間に存在する自分自身を、たくさん想像し、創造してほしいなと思います。

遠山正道
Masamichi Toyama

芸術学部
共創デザイン学科
特任教授

1962年東京都生まれ。慶應義塾大学商学部卒業後、1985年三菱商事株式会社入社。2000年株式会社スマイルズを設立。現在、「Soup Stock Tokyo」「giraffe」「PASS THE BATON」「100本のスプーン」などの事業を展開。「生活価値の拡充」という理念のもと、既成概念にとらわれず、一人ひとりの発意を起点にした価値づくりに邁進している。

第1期生62名の皆さん　私は皆さんが本当に羨ましい。1)皆さんは否が応でも巨大な変化のど真ん中の当事者で時代の主役です。だから私は皆さんから時代の感性を大いに学びたい。そこにこれからの大事な要素が潜んでいる。2)第1期生は一生第1期生。その責任とプライドが大きな力になる。3)これからの全てがプロジェクト化する時代に、こんなに若くプロジェクトを体現できること。、、だから羨ましい。私は何かを教える気も内容もありません。一緒にプロジェクトを創っていく。だから、私の授業では受身ではなく一人ひとりが当事者で、自分ごとで自ら進めていってください。私や学校や親や社会のせいにしないでください。それらはあなたの主役である人生のサポーターでしかないから。ああ、今から62人の主役が舞台に立つ。 パチパチ 楽しみだなあ。

唐見麻由香
Mayuka Karami

芸術学部
共創デザイン学科
准教授

1999年(株)本田技術研究所四輪開発センターのCMF(カラー/マテリアル/フィニッシュ)デザイナーとして入社。CMFデザインを通して新しいモビリティライフを提案し、ホンダブランドを代表する多数の車両デザインを担当。車両開発と並行し、インターンシップ、ワークショップ等を通じた学生教育にも注力。2020年大妻女子大学、同年より女子美術大学にて非常勤講師を努める。

社会に出ると、自分の事を考える時間は圧倒的に少なくなります。でも自分の人生を楽しんでいくためには自分の得意・不得意を知ることが大切です。学生時代は自分自身を見つめることができる貴重な時期です。自分の得意分野を見つけるためにも、新しいことにどんどんチャレンジして多様な経験を積んでください。時には失敗することもあると思いますが、それも自分を知るための重要な経験の一つになります。何が起こるか想像のつかない時代ですが、四年間の大学生活を通し、自分の軸を持ちつつも時代の変化に合わせてしなやかに生きる柔軟性や応用力を育ててほしいと思います。

羽田成宏
Narihiro Haneda

芸術学部
共創デザイン学科
特任准教授

1979年愛知県生まれ。2004年名古屋大学大学院工学研究科応用物理学専攻修了後、同年ブラザー工業株式会社に入社。2009年に株式会社デンソーに入社し、自動運転時代のHMI開発やモビリティ領域の新規事業開発及び社内起業プログラムを推進。2020年より東北大学発の量子コンピューティング活用スタートアップである株式会社シグマアイの事業開発マネージャとして、事業戦略の立案から推進までを手がける。

「なぜ共創するのか」人類が息を吸う様にそうしてきたからこそ現在まで地球上に存在できているとすると、この問いは意味をなさないように思えます。しかしながら、そこから逃げずに真正面から向き合うとどうでしょうか。一人では決して生み出したり達成したりできない様なチャレンジや創造性を生み出すことも、自分以上に自分のことを教えてくれる他者との関係性を築くことも、敵対しているが同じゴールに向かって歩むべき相手との活動を前に進めることも、AI(人工知能)の様なテクノロジーをあたかも魔法の様に使うことも、“魔法使い”と共に新しい魔法を創造することも共創だと考えています。「自分にとって共創とは」この正解のない、でも人生を必ず豊かにしてくれる問いに対して皆さんが立ち向かっていけるように皆さんと共創していきます。

山田夏子
Natsuko Yamada

芸術学部
共創デザイン学科
特命教授

1973年東京生まれ。1996年武蔵野美術大学造形学部彫刻学科卒業。同年よりバンタンデザイン研究所にてスクールディレクター、校長、教育責任者を担当。2008年に独立し、株式会社しごと総合研究所を設立。グラフィックファシリテーションを活用した「組織開発」を展開し、携わった組織は950社以上。様々な形で深い理解を育む対話支援をしている。2017年NHK総合『週刊ニュース深読み』(1年間レギュラー)他 多数出演。著書『グラフィックファシリテーションの教科書』、監訳書『場から未来を描き出す』がある。

「競争」ではなく「共創」に。優劣を競うのではなく、違いを活かす。私たちの心の中には「同じである方が安全」という感覚があります。けれども、同じベクトルばかりがずっと集まっていると、やがて競い合いが生まれます。少し勇気を持って、ベクトルの向きの「違い」に好奇心を向けてみてください。そして、その「違い」の背景には何があるのか?そこにアンテナを立てて、仲間や先生方と、ぜひ突っ込んだコミュニケーションをとってみてください。きっとそこから「共創」の一歩が始まります。自分と違う様々な人の様々な視点を理解して、今社会が必要としているのは一体何か?見えないものを見る力を、一緒に養っていきましょう。

退職された先生方

芸術学部	美術学科	美術教育専攻／共通専門	教授	前田基成
芸術学部	美術学科	芸術文化専攻	教授	坂田勝亮
芸術学部	美術学科	芸術文化専攻	教授	杉田敦
芸術学部	デザイン・工芸学科	工芸専攻	教授	吉田潤一郎
芸術学部	アート・デザイン表現学科	メディア表現領域	教授	川口吾妻
芸術学部	アート・デザイン表現学科	アートプロデュース表現領域	教授	南島隆

在学中に築き上げた揺るがない「好き」の気持ちが好きなことを仕事にし続ける原動力です。

川口詩織さん
芸術学部 アート・デザイン表現学科
ヒーリング表現領域 2017年3月卒業

ぬいぐるみやキャラクター玩具の企画・製造会社「サン・アロー」。1918年創業の歴史ある企業であり、きっと皆さんも一度くらいは、サン・アロー製品を手にしたことがあるのではないでしょうか。ぬいぐるみ＆キャラクター好きには夢のようともいえる環境で働く卒業生・川口詩織さんに、お仕事のこと、大学時代のことなどを伺いました。

株式会社サン・アロー

テディベアや動物、キャラクターなどのぬいぐるみや雑貨の企画・製造を手がける、日本を代表するぬいぐるみメーカー。多くのヒット商品を生み出す一方、伊豆と那須で「テディベア・ミュージアム」の運営や、「We Create Happiness」を合言葉にぬいぐるみを通じた社会貢献活動も行っています。
https://www.sun-arrow.com

とにかくぬいぐるみが大好き！

物心ついた頃からぬいぐるみは私の生活の一部でした。大学進学にあたっては、ぬいぐるみやおもちゃ、キャラクターなど好きなものをピンポイントで学べることから、迷わずヒーリング表現領域へ。ひとりっ子というのもあり、寂しい時にぬいぐるみは癒やしの存在でしたから、癒やしについて学ぶということにも興味を持ちました。ただ、ぬいぐるみ作りが好きになったのは大学に入ってからです。入学前は、作りたいというより、ただただ好き！という気持ちでした。大学で学ぶことで、自分の好きなことを将来につなげたいとも考えていました。

今も心の支えであり続ける卒業制作

在学中はぬいぐるみやキャラクター制作に力を入れていました。なかでも卒業制作は、今も思い出すたび初心に戻ることができる、自分の人生にとって大切な作品になりました。「将来の支えになるようなものを作るといいよ」という先生の言葉を胸に、人のためだけでなく、自分のためにも作る卒業制作にしたいと挑んだ作品。「ぬいぐるみはかけがえのないもの」という、自分のぬいぐるみに対する思いを形にする過程で、小さな頃から抱いてきた「ぬいぐるみが好き」という気持ちが揺るぎないものになりました。制作過程で、さまざまな人のぬいぐるみに対する思いもインタビューも行ったことで、多様なぬいぐるみとの関係性を受け入れられるようにもなりました。実際に社会人になると、ぬいぐるみと自分について純粋な心でじっくりと考えられるような機会はなかなかありません。卒業制作を通じた経験は、ぬいぐるみを仕事にしている今も、心の羅針盤のように、私の支えになってくれています。

本物のぬいぐるみのプロになれる環境

振り返れば就職活動も、ぬいぐるみに関わりたいという気持ちが本物なのか?を確かめる場だったように思います。ぬいぐるみを作りたい気持ちはあったけれど、職業として本当に自分に合っているのかはわからず迷っていました。そこで、視野を広げるためにキャラクター業界やおもちゃ業界にも広げて企業のインターン説明会やOG講演などに積極的に参加しました。その過程があってこそ、やはり自分はぬいぐるみだ、と確信することができました。

ぬいぐるみ会社のなかでもサン・アローを志望したのは、ぬいぐるみを型紙から作れることが決め手でした。イチから作れることは、確実に自分の力になると思ったのです。また、実際に働いて感じるのが、作るだけではなく企画やミュージアムの運営など、ぬいぐるみを中心にその端から端まで関われることも、サン・アローの大きな魅力だということ。本物のぬいぐるみのプロになれる環境だと思っています。

ぬいぐるみ作りは職人技です

ぬいぐるみ作りは、基本的にほぼ手作業です。女子美時代に製作技術は学んできたつもりでしたが、仕事での実践は本当に難しい。量産工場に見本として渡すものを作る仕事なので、絶対に正しい形を作らなければいけない。職人技が要求される世界です。私は今入社7年目ですが、慣れるのに時間がかかるタイプでしたから、ある程度一人前といえるようになるまで5年くらいかかりました。基礎の基礎から始めて、技術を一つずつ習得していきますが、とにかく数え切れないほど大量に作って、コツを身につけていきました。そんな大変な時代にも、前述した卒業制作での経験が支えになってくれました。女子美での学びで私が得たものは、技術より何よりぬいぐるみへの思いの深さだったのだなと実感しています。

好きを仕事にするということ

これを読んでくださっている皆さんのなかには、好きを仕事にしてもいいのかな?とためらっている方もいるかもしれません。でも、好きだという気持ちが確かであれば、ぜひ突き進んでほしいと私は思います。たとえば、ぬいぐるみ業界は大変な部分もありますが、私にとっては、好きだからこそほかの仕事では味わえない達成感や充実感があります。息抜きに出かけたぬいぐるみ屋さんで、自分が手がけたぬいぐるみを「かわいい!」と抱きしめながら買ってくれた女の子を偶然目にして、感動したこともありました。自分が作ったものが、自分が笑顔になるのと同じくらい誰かを笑顔にできることを心底嬉しく感じられるのは、やっぱり好きなことを仕事にしているからこそなんです。皆さんも、在学中に自分の軸になることを見つけて、ぜひ納得のいく未来を歩んでください。応援しています!

Text 株式会社TURBAN Photo 渡辺一城

古山 春香

ITALY

Q1 海外で活動するようになったきっかけは？

実は高校を卒業してから、元々持っていたデザインへの興味を押し込めて、地元で堅実に会計士をしようと思い、経理の専門学校に通っていました。ですが、会計がどうにも楽しめず、学校の近くにあったせんだいメディアテークで授業をサボりながら海外のデザインや建築、アートの本を見るうちに、封じていた気持ちが爆発して、美大に通うために東京へ引っ越すことにしました。その頃に見ていた本の中の世界は壮大で、いつか私も海外で活動したいと思うようになりました。

Q2 美大の中で女子美を選んだのはなぜですか？

日本ならではの、型に正しくハマることを良しとする入試制度に疑問を感じていて、自分らしさをアピールできるAO入試（現：総合型選抜）を実施している大学を探したところ、当時数少ない候補の中に女子美の短期大学部がありました。歴史ある学校なのに頭が柔らかい、いい意味でのコントラストを感じ、面白い学生が集まっていそうだなという期待から女子美を選びました。

Q3 女子美時代はどんな学生でしたか？

女子美在学中に縁があって、世界各国から東京へ仕事に来る車のデザイナーやプロダクトデザイナーたちと交流するようになり、彼らの優秀さに鼓舞されながらも常に劣等感を感じていました。インターンの学生との間にも圧倒的な力量の差があり、一体何を見て何をしたら追いつけるのかを考える毎日でした。それと同時に、彼らは多大なる興味関心を持って日本へ来ているんだということに、日本人として誇りを感じ、彼らが日本のどこに魅力を感じているのか、外から見た日本らしさとは何だろうと考えることも多くなりました。

Q4 女子美時代の、特に印象深い思い出は？

女子美の短大は、コースを選ぶまでにさまざまな分野を体験する期間が組み込まれていました。最終的に専攻として選んだインテリアの分野の他にも、木工、金工、テキスタイル、陶芸など実際に幅広く触れることができました。その時に生まれた好奇心をその後の人生の中で深めていった結果、現在の自分の軸となる活動として発展したものもあり、無駄なことは一つもありませんでした。どんなに小さなきっかけも、大切に育てていくと思いがけない楽しみが見つかることもあるのだと実感しています。

Q5 制作する上で大切にしていることを教えてください。

一期一会の精神を大切にしています。さまざまな出会いが人生を豊かにしてくれると日々の生活・活動の中で実感していて、それは作品や仕事にも自然に映し出されるように思います。さまざまな出会いに支えられて今がある、自分の後ろには何百何千という祖先が受け継いできた命があると思うと、自分に与えられた時間や課題に向き合うモチベーションを与えてくれます。

Capellagården（スウェーデン）での卒業制作「Lilla Ateljen」シリーズ
2012

「Lilla Ateljen」シリーズのサイドテーブルと陶芸作品、
掛軸「寂」
2012（Lilla Ateljen サイドテーブル）、
2021（掛軸「寂」）、2022（茶道具、花器）

Q6 海外で活動することの楽しさとは？

私はクラフトとデザインの分野でお仕事をしていますが、自分とは文化背景がまったく異なるさまざまな国の人たちと関われることが一番の楽しみで、そこから学ぶことは大きいです。さまざまな角度からの意見やアイデア、物事の見方を知ることで、自分の色がわかってきて、それをどう生かすか試行錯誤を繰り返しながら磨かれていく感覚があります。日本でも同じですが、海外だと多様性の振り幅が大きいので、荒波の中で否が応でも体幹が鍛えられるのかもしれません。

Q7 大学時代にやっておくべきことついてアドバイスをお願いします。

好奇心を持って、少し自分から離れたところにある物事も見てみると良いと思います。一つでも多くのきっかけがあると、それが種となって、思いもよらないところで花を咲かせるものだなあと、常々思っています。大学時代ほど自由に動ける時期はなかなかないですし、種まきの時期が早いほどそれを育む期間も長くなります。より多くの種がその後の人生をより華やかにしてくれると思います。

Q8 やりたいこと、夢を実現するためのヒントを教えてください。

興味があることや思っていること、やりたいことなどを周りに伝えることが大切だと思います。結果としてできるかどうかは関係なく、どんなに実現可能性が低いことだとしても、笑われたとしても、自信を持って「自分はこうしたい」と方々で伝えて周知することで、それにつながる何かが誰かの耳に届いた時に、「そういえば」とお声掛けをもらえることが多々あります。それらが手掛かりになって、めざす場所に大幅に近づくことができたり、その時点では無理だと思っていたことが実現されたりすることもあります。

Q9 女子美生にメッセージをお願いします。

虫眼鏡と望遠鏡をいつも心のどこかに持つように意識すると、自分のことも、自分を取り巻く環境のことも認識しやすくなるように思います。突き詰めて細部を注意深く見ることも、目の前の物事から離れて全体像を客観的に見たり遠くを見たりすることも大切で、特に行き詰まった時には視点を変えることで気づくことも多々あります。大いなる冒険を楽しむ仲間として、いつかどこかで出会えることを楽しみにしています。

「Lilla Ateljen」ラインとしてデザインしたローボード
2017／WOODMAN（エストニア）

「Lilla Ateljen」シリーズから
商品化されたサイドボード "Side by side"
2014／BOLIA（デンマーク）

陶芸作品（茶道の炭道具）
2022

古山 春香（ふるやま・はるか）

2007年女子美術大学短期大学部専攻科修了。同年より大学時代の講師であった、インターデザインアーティストの織咲誠氏に師事。2009年よりスウェーデンのCapellagården（カペラゴーデン）で木工と家具デザインを学び、2012年に卒業。同年、"Haruka Furuyama Design & Craft" を設立。2014年、女子美ミラノ賞受賞、渡伊。2015年、Migliore+Servetto 事務所での1年間の研修を修了。現在はフリーランスで家具のデザイン活動を続けつつ、DANS、Triumph Design Resource S.R.L. にてマネージング・ディレクターを務める。
Haruka Furuyama Design & Craft, Sweden：http://www.hfdc.se
DANS, Tokyo/Milan：http://www.dans.jp
WOODMAN, Estonia：https://www.woodman.ee/en/designers

HARUKA FURUYAMA ITALY

『鬼灯の冷徹』全原画収蔵記念展

2022年10月～翌年1月にかけて、秋田県横手市にある「横手市増田まんが美術館」にて「『鬼灯の冷徹』全原画収蔵記念展」が開催されました。『鬼灯の冷徹』は、本学芸術学部美術学科日本画専攻卒業生で漫画家の江口夏実さんによる大人気漫画作品で、週刊モーニング誌（講談社）にて連載され2020年に完結。今回、その全ての原画が「横手市増田まんが美術館」に収蔵されたことを記念し開催されました。

展示ブースでは、作品の全原画を巧みに使い、登場キャラクターや地獄の日常など作品の世界観を章ごとに分けて紹介。その他、ネームや落書きギャラリー、『鬼灯の冷徹』連載へと繋がった読み切り作品『地獄の沙汰とあれやこれ』の原画など、数々の貴重な作品も展示。また、展示の他にもコラボカフェや美術館周辺の町並みを楽しみながら参加できるスタンプラリーも実施され、コラボカフェのグッズ付きメニューは早々に完売するなど大いに賑わいました。

「江口さんの原画には美しさや丁寧さの中に力強さが見られる」と語るのは、横手市増田まんが美術館館長の大石卓さん。「江口さんが描いたF130号（1940×1620㎜）の卒業制作からもその片鱗がうかがえる。漫画家の矢口高雄先生も『絵描きは大きい絵が描けてなんぼ』とおっしゃっていた。学生時代に培った確かな技術があるからこそ、素晴らしい作品、そして原画が生まれる」と江口さんの魅力を語りました。

「連載終了から長い時間が経ったとしても、きっと再燃するときが来る」と大石さん。『鬼灯の冷徹』が多くの方々に愛されていることが伝わってくる展覧会でした。

横手市増田まんが美術館

館長 大石 卓さん

第1期
2022年10月8日(土) ～ 2022年11月13日(日)

第2期
2022年11月19日(土) ～ 2023年1月15日(日)

展示ブース「地獄」©江口夏実／講談社

展示ブース「カラー原画ギャラリー」©江口夏実／講談社

展示ブース「地獄の日常」©江口夏実／講談社

読み切り作品『地獄の沙汰とあれやこれ』原画 ©江口夏実／講談社

『鬼灯の冷徹』ネーム ©江口夏実／講談社

展示ブース「落書きギャラリー」©江口夏実／講談社

NEWS — & — TOPICS

01 | 萩尾望都客員教授が令和4年秋の叙勲で旭日中綬章を受賞されました

令和4年秋の叙勲において、漫画家で本学客員教授である萩尾望都先生が旭日中綬章を受章されました。
1969年に漫画家デビュー。SF、ミステリー、ファンタジーなど幅広いテーマの名作を数多く生み出し漫画文学の最高峰と言われる作品群を制作。2011年より本学芸術学部アート・デザイン表現学科メディア表現領域客員教授。以来、長年にわたって教育に携わり、本学の発展に貢献し、現在も漫画家として精力的に制作・発表を続けています。

02 | 女子美術大学大学院・芸術学部・短期大学部　2023年度 入学式

杉並・相模原両キャンパスにて、令和5年度女子美術大学大学院・芸術学部・短期大学部入学式が4月5日に執り行われました。今年度も新型コロナウイルス感染症予防対策を講じ、各キャンパスの体育館にてそれぞれ実施。また、列席できない保護者の皆様に向けて、各式の模様をYouTubeにてライブ配信しました。今年度、女子美は大学院美術研究科 49名、1期生となる共創デザイン学科の新入生62名を含む芸術学部761名、短期大学部 162名（専攻科含む）、計972名の新入生を迎えることができました。

03 | 訃報　奈良岡朋子名誉博士がご逝去されました

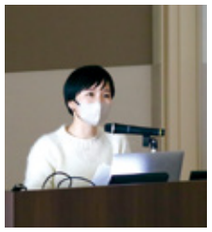
本学卒業生で女優、本学名誉博士の奈良岡朋子先生が、3月23日、93歳でご逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。1951年に女子美術専門学校（現：女子美術大学）絵画科洋画部卒業、在学中は演劇部に所属。2年次の1948年、民衆芸術劇場の研究生となり、同年『女子寮記』で初舞台を踏みました。主な出演作品は、舞台『奇跡の人』、映画『はなれ瞽女おりん』、テレビ『ゼロの焦点』など。劇団民藝の代表であり、2008年には本学名誉博士称号が授与されました。

04 | 2022年度 100周年記念大村文子基金授賞式

2022年11月17日本学杉並キャンパスにて、『100周年記念大村文子基金授賞式』が執り行われました。大村文子基金は、本学名誉理事長大村智博士夫妻による寄付をもとに、文子夫人の名前を冠して創設され、卒業生の制作・研究活動の奨励と在学生・生徒の美術活動を奨励するため、数々の褒章事業を行っています。授賞式には、「大村特別賞」を受賞したハローキティ3代目デザイナーである山口裕子さんのほか各賞受賞者が出席し、大村智名誉理事長よりお祝いの言葉をいただきました。

05 | 前田基成先生の最終講義が行われました

2023年3月で本学を退職された前田基成先生の最終講義が、1月25日に相模原キャンパスにて行われました。前田先生は1995年度より本学で教鞭をとられ、芸術学部 共通専門（教職課程）および美術学科美術教育専攻 教授として多くの学生を指導されました。最終講義のテーマは「美術教育を科学する」。先生は、本学での指導の傍ら、研究者として「ニューロイメージング（脳の機能の可視化）」の研究をされており、それを美術に関連づけられないかと考え、数々の実験を行いました。その実験例を紹介いただきながら、「人がなぜ絵を描くのか」「美しさを求める心はどこから来るのか」など、美術・デザインを学ぶ学生にとって根幹となる意識を、先生ならではのユーモアを交えつつ臨床心理学・精神医学の観点から解説。会場に訪れたたくさんの聴講者は熱心に耳を傾けていました。講義終了後には、研究室や在学生、駆けつけた卒業生から花束が贈呈され、たくさんの拍手が送られました。



10 | 飯山由貴さん 特別講演会開催

11月21日、本学芸術学部美術学科洋画専攻卒業生で美術作家の飯山由貴さんによる特別講演会「聞くことの倫理、見えるようにすることの倫理、共にいるための倫理」が開催されました。飯山さんは、映像作品とともに記録物やテキストなどから構成されたインスタレーションを制作し活動されています。講演会では、学生時代から取り組まれている、多様な背景を持つ方々との共同制作を多数ご紹介いただき、制作にあたっての倫理観の捉え方についてお話いただきました。また、終了後には、自身のポートフォリオを飯山さんに見せアドバイスをいただいたり、制作における悩みを相談したりするなど、大変有意義な時間となりました。

Photo : Luca Tombolini

09 | YUIMA NAKAZATOのショーにて『天然顔料サブミクロン・ナノ粒子顔料の応用創作研究』が活用

1月25日、パリにて中里唯馬さんのクチュールブランドであるYUIMA NAKAZATOの Spring/Summer 2023 コレクション『INHERIT』が公開。コレクションの一部に、日本画専攻教授の宮島弘道先生がケニアの石を1000分の1mm粒子に粉砕し、出来上がったパウダーで工芸専攻准教授の荒姿寿先生が浸染した布が使用されました。中里さんがテキスタイルの技術的可能性を探求する中で、本学染織文化資源研究所が取り組んでいる『天然顔料サブミクロン・ナノ粒子顔料の応用創作研究』に興味を持っていただいたことで今回のコレクションへの活用が実現しました。

11 |

駐日ジョージア大使による オンライン授業が行われました

11月11日、駐日ジョージア特命全権大使であるティムラズ・レジャバ氏による「国際交流文化概論B」のオンライン授業が行われました。異文化理解・国際交流・留学知識の取得を目的とし、在東京の各国の大使館および海外アーティスト等によるレクチャーが行われる本授業では、様々な国の歴史や文化、社会課題等を最新の状況とともに学び、グローバル社会におけるアートや、アートを通じた国際交流の可能性を考えることが大きなテーマです。授業では、レジャバ氏よりジョージアの国や文化についての説明に加えて、同大使館が行っている漫画やアートとキャラクターを用いたプロジェクトNFT『Supra3.0』について詳しくお話いただきました。終盤では、言語や食に関してから日本との共通点に関してまで、多くの質問が学生から寄せられ、大使からは「雰囲気の良さと熱量が伝わってくる」とコメントをいただきました。

写真提供：株式会社TYO

『せんめんじょ』

06 | 「第3回 TYO学生ムービーアワード」表彰式が行われ 短期大学部専攻科の土屋遥さんが銅賞を受賞しました

3月2日に「第3回 TYO学生ムービーアワード」の表彰式が赤坂インターシティコンファレンスにて行われ、本学短期大学部専攻科・土屋遥さんの『せんめんじょ』が銅賞を受賞しました。約3年ぶりの開催となった本アワードは「踊る」をテーマに60秒のショートフィルムをジャンル問わず募集。土屋さんは「実家に住んでいた時、家族にはお風呂に入ると伝えて洗面所で踊っていた」という自身のエピソードから、ロトスコープという技法を用いて約500枚もの原画をもとに動画を制作しました。審査員である株式会社TYO代表取締役社長の早船浩氏からは「動画の説明文を拝見した際、土屋さんの発見・着眼点に審査員から共感の声が上がりました。『鏡の中で踊る、家族も知らない自分の姿』がうまく表現できているところを評価しました。」とコメントをいただきました。

受賞作品・受賞者コメントは下記URLよりご覧ください。
◁ https://tyo-gama.jp/award/03/
TYOニュースリリース https://tyo.co.jp/topics/20230303-1/ ▷

08 | 「南区アイディアコンペ」にて、本学学生がデザインした キャラクターが採用されました

この度、相模原市の「南区若者参加プロジェクト実行委員会」が主催する「南区アイディアコンペ」にて、本学洋画専攻3年の水野海依さんがデザインしたキャラクターが採用されました。「南区アイディアコンペ」は、若い世代のまちづくりへの参加を目的として、2014年から年に1回開催されるプレゼンテーション大会形式のイベント。今回は、2026年に開催予定の「南区ブルーフェスタ」のマスコットキャラクターのコンペティションを実施。8つの作品の中から参加者投票の結果、水野海依さんの「みなクジャくん」が選ばれました。本学相模原キャンパス近くの相模原麻溝公園ふれあい動物広場にいるインドクジャクからイメージを着想。「相模原市には思い入れがあるので凄く嬉しい。フェスタも盛り上がってほしい」と喜びを語りました。

07 | 神田女学園中学校高等学校と 教育交流に関する協定を締結

この度、本学は神田女学園中学校高等学校(芦澤康宏校長)と教育交流に関する協定を締結する運びとなり、2023年3月2日に杉並キャンパスにて協定調印式を執り行いました。神田女学園中学校高等学校は「伝統」と「革新」の女子教育校であり、本学が目指す教育との親和性が高く、本協定を受けて今後はより一層の連携の充実・強化を図ってまいります。

14 | 『Sense Of Oneself ～自分のいろ・あなたのいろ・誰かのいろ～』展

男女共同参画センター横浜北でアートプロデュース表現領域3年生による展示が、2月11日から1週間行われました。学生たちは男女共同参画センターの事業内容・ジェンダー課題を学習した上で、個のあり方を色として捉え、個人の考え方や生き方を尊重し見つめ直すきっかけとなるイベントを目指し、作品展示・ワークショップ・映像作品を企画・制作しました。小学生を対象としたワークショップでは、大切な人へ思いを伝える「色」をテーマにギフトボックスづくりを行いました。子どもたちも楽しみながら大切な人の『色』について考え、企画・実施をした学生の成長が見られたイベントとなりました。

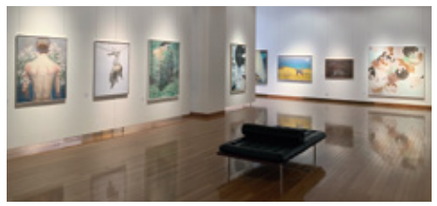
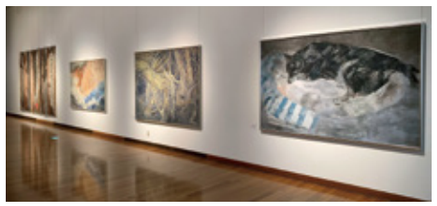
映像作品「Sense Of Oneself ～見えない色～」
女子美術大学アートプロデュース表現領域
https://www.youtube.com/watch?v=X7Wn8qYagrQ

12 | 「2022 MULBERRY CITY ネクタイデザインコンペ」にて本学在学生が入選

八王子織物工業組合による、学生からジャカード織ネクタイのデザイン案を募集するコンペティション「MULBERRY CITY ネクタイデザインコンペ」。8回目となる今回は347点の応募の中から18点が選出され、その内、工芸専攻織コースに在籍する4年生（受賞時3年生）によるデザイン3点が入選しました。今回のデザインの募集テーマは「桑都物語八王子～自然と文化に育まれた日本遺産～」です。採用されたデザインのネクタイは製品化され、「八王子織物工業組合直営ショップBENECK」の店舗やオンラインショップにて販売されています。

- □ グランプリ 経済産業大臣賞　伊藤佐恵子　『調和』
- □ 東京都知事賞　本間友夏　『祭囃子』
- □ 入選　黒川真帆　『自然が織りなす八王子』

八王子織物工業組合『SHOP BENECK』　WEBサイト
https://hachioji-orimono.or.jp/shop-beneck/

13 | 女子美術大学×佐倉市立美術館『美粒子～女子美術大学日本画作品展』

3月7日～19日の期間で、千葉県の佐倉市立美術館にて『美粒子～女子美術大学日本画作品展』が開催されました。本学の前身である「私立女子美術学校」時代より関係のある佐倉市とは、2012年4月に地域社会の発展と人材育成に寄与することを目的とした連動協働に関する協定を結んで以来、相互の協力のもと、歴史や芸術に関する講義やワークショップなど、様々な事業が実施されてきました。今回の展覧会では、本学美術学科日本画専攻の在学生・卒業生・教員29名による38点の作品が並びました。21世紀という「今、この時」を「日本画」という長い歴史で磨かれてきた技術を用いて表現しながらも、既存の「日本画」の概念にとどまらない、自由でクリエイティビティに富んだ作品が一同に会しました。

15 | 本学卒業生が令和4年度（第73回）芸術選奨の評論等部門にて文部科学大臣賞を受賞しました

本学芸術学部絵画科日本画専攻（現：同学部美術学科日本画専攻）卒業生で、東京都江戸東京博物館都市歴史研究室長の岡塚章子さんが、令和4年度（第73回）芸術選奨の評論等部門にて文部科学大臣賞を受賞。今回、岡塚さんは、明治中期から大正期にかけて写真師として活躍し、日本の写真文化の発展に影響を与えた小川一眞についての長年にわたる調査・研究の業績が称えられての受賞となりました。その成果は、著書『帝国の写真師　小川一眞』にてご覧いただけます。

16 | 橋本駅前のリニア中央新幹線駅新設工事現場 仮囲いのデザイン画・キャプション制作を行いました。

この度、橋本駅前のリニア中央新幹線駅新設工事現場の仮囲いに「リニアのある明るい未来」をテーマとしたデザイン画・キャプションの制作を本学学生デザインルームで行いました。2021年は多摩美術大学に、2022年は本学と東京造形大学に依頼があり、2022年9月21日にデザインルームの5名の学生（佐藤愛、佐久間千尋、田谷初音、関華蓮、渡部なお）によるデザインが完成いたしました。

17 | 第20回えどがわ伝統工芸産学公プロジェクト

江戸川区の伝統工芸者の技と本学学生がコラボレーションし、実際に製品化・販売まで行うプロジェクト「えどがわ伝統工芸産学公プロジェクト」の第20回新作発表会が開催されました。今回発表された56点の作品のうち、「えどがわ賞（最優秀賞）」は石川榛奈さんがデザインしたコーヒーサーバー『甘雨（かんう）』に、「教員賞（優秀賞）」は円谷彩乃さんによるデザインの金属製の栞『栞折（しおり）』、山口さくらさんによるフラワースタンド『rin』と、小川舞さんによる風鈴『レトロソーダ』がそれぞれ受賞しました。

杉並・相模原キャンパスの環境整備

本学では、２０２５年の創立１２５周年に向けて、杉並・相模原キャンパスの環境整備に取り組んでいます。今回は、相模原キャンパスの図書館（３号館）１階のリニューアルと８号館別棟の増築についてお知らせいたします。

相模原キャンパス図書館（3号館）１階のリニューアル

今回、社会の変化に対応しながら発展し続けられる図書館を目指し、ICT技術を取り入れたアクティブラーニングが可能な設備や、学生や教職員が集い、学び・研究することのできる場としてのスペースを備えるための改修を実施しました。

アクティブラーニングエリア

大人数のディスカッションや授業、講演会などに利用できるエリア。カーテンを使うことで周りの空間と緩やかに仕切れます。また、講演会などの際に、好きな場所に配置できる可動式のひな壇も備えており、多くの人が座れるようになっています。

グループラーニングルーム

グループ学習やゼミで利用できる個別の学習ルーム。ガラス張りとなっており、可動式の仕切りの有無でスペースの大きさを変化することができます。

ラウンジ

図書館ゲート前にある休憩スペース。ロッカーも完備されており、さまざまなシーンで利用可能。

相模原キャンパス８号館別棟の増築

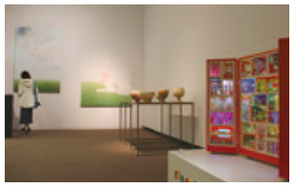
洋画専攻の2コース（絵画・版画）と日本画専攻の工房や教室がある8号館に、版画実習室として別棟を増築しました。ディスカッションや講評会、作品撮影などのスペースとして使用できる814B教室と腐蝕室・アクアチント室・有機溶剤室の3つの工房からなる814A教室の2教室があります。

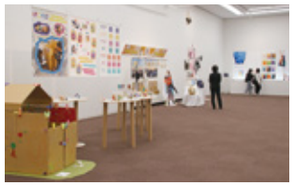
814A教室（有機溶剤室）

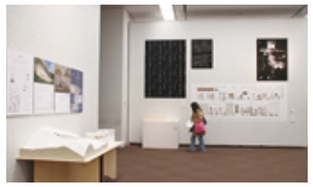
8号館別棟 外観

東京都美術館とオンラインにて開催、JOSHIBISION 2022

本学大学院・芸術学部・短期大学部の各研究室から選抜された作品、および付属高等学校の卒業制作を一同に展示した「JOSHIBISION ２０２２ ―アタシの明日―」が２０２３年３月１日～５日まで東京都美術館にて開催されました。今年で７回目の開催となる「JOSHIBISION」。このタイトルはJOSHIBI×EXHIBITION×VISIONをつないだ造語です。「いまを生きる、等身大の学生たちのさまざまな視点が集まり、ともに未来を見つめていこう」というメッセージが込められています。３月１日には特別ゲストに大小島真木さん（美術家）、潘逸舟さん（アーティスト）、水沢勉さん（美術評論家）をお招きし、出展学生との交流会が開催されました。全体講評では洋画専攻の大森悟先生が司会を務め、学生たちは現役で作家・評論家として活躍されるゲストたちと意見を交わすことで有意義な時間を過ごしました。







2022年度 卒業制作展／修了制作展 開催

本学大学院・芸術学部・短期大学部の2022年度卒業制作展／修了制作展が杉並と相模原の両キャンパスにて行われました。芸術学部と短期大学部は2023年3月10日～12日、大学院の展示は3月10日～15日の期間で開催。4年間、あるいは2年間の学生生活の集大成として、それぞれの想いが詰まった力作が多く展示されました。

SAGAMIHARA CAMPUS

SUGINAMI CAMPUS

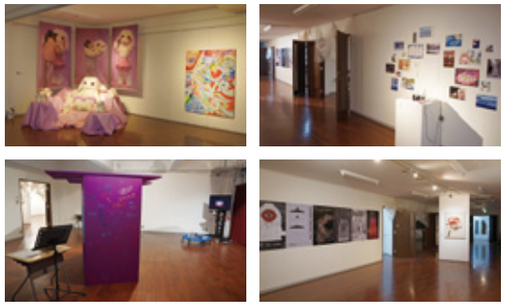
2022年度
学外卒業・修了制作展

2023年1月から各学科・
専攻・領域・コースごとに
行われました学外での
卒業・修了制作展の
様子をご紹介いたします。

新型コロナウイルス
感染予防対策を
講じた上での
実施となりましたが、
学生生活の集大成である
卒業・修了制作を
見るために、
在学生や保護者、
卒業生などが
会場を訪れました。

芸術学部 アート・デザイン表現学科
アートプロデュース表現領域
「JOSHIBI AP Graduate & Degree Show 2022 〜 楽園の出口 〜」

会期：1月13日〜1月24日
会場：ガレリアニケ（東京都杉並区）

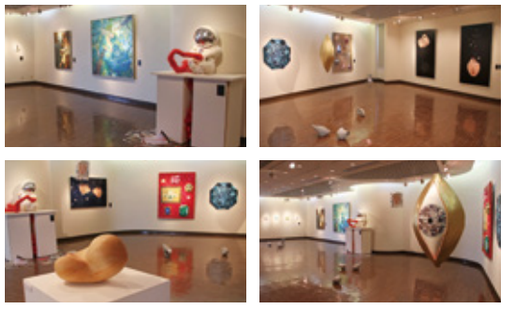


芸術学部 デザイン・工芸学科
プロダクトデザイン専攻
卒業制作学外展示

会期：2月3日〜2月5日
会場：横浜市民ギャラリー（神奈川県横浜市）

芸術学部 美術学科
美術教育専攻
有志卒業制作展「ビ・ビ・ビ！キョウ！！！」

会期：2月3日〜2月6日
会場：品川区民ギャラリー（東京都品川区）



芸術学部 アート・デザイン表現学科
ファッションテキスタイル表現領域
「卒業制作展2023 -SPARK-」

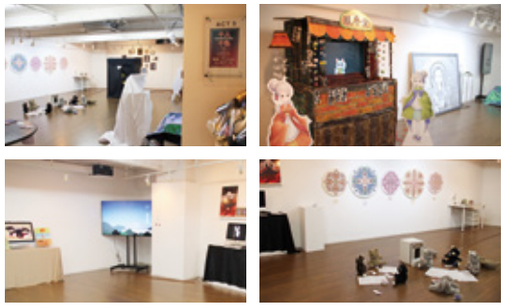
会期：2月17日〜2月19日
会場：AXIS Gallery（東京都港区）

短期大学部 造形学科
デザインコース テキスタイル
卒業・修了制作学外展

会期：2月9日〜2月12日
会場：AXIS Gallery（東京都港区）

芸術学部 アート・デザイン表現学科
メディア表現領域
10期生 卒業制作有志展「十人十色」

会期：2月21日〜2月26日
会場：The Artcomplex Center of Tokyo（東京都新宿区）



芸術学部 デザイン・工芸学科
環境デザイン専攻
有志卒業制作展「it's a long road ahead.」

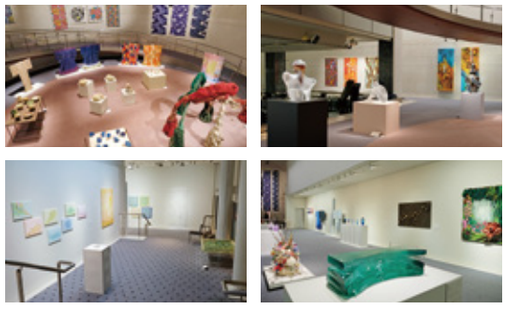
会期：2月11日〜2月13日
会場：Chromatic Gallery（東京都渋谷区）

芸術学部 デザイン・工芸学科
ヴィジュアルデザイン専攻
有志卒業制作展「000」

会期：3月15日〜3月19日
会場：ギャラリー・ルデコ（東京都渋谷区）

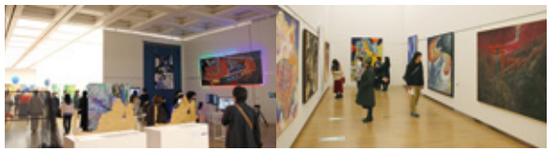
芸術学部 デザイン・工芸学科
工芸専攻
卒業・修了制作展2023

会期：2月10日〜2月14日
会場：Spiral Garden（東京都港区）



令和4年度・第46回
東京五美術大学
連合卒業・修了制作展
開催

2023年2月25日～3月5日の9日間に渡り、東京五美術大学（武蔵野美術大学・多摩美術大学・東京造形大学・日本大学芸術学部・女子美術大学）の美術系学科による卒業・修了制作展「東京五美術大学 連合卒業・修了制作展」が国立新美術館にて開催されました。昨年に引き続きコロナ禍での実施となりましたが、出展関係者の行動管理、密の回避、消毒といった感染防止策を徹底して行われました。また今年は五美大展合同企画として、各大学から選出された出品者5名とゲスト作家による対談企画『制作者による、制作者のためのはなし』を開催。今年も五美術大学の個性がつまった作品が一堂に会し、来場者を魅了しました。



女子美術大学美術館賞

修了制作及び卒業制作が優秀な学生に授与される女子美術大学美術館奨励賞受賞者の中から1名に「女子美術大学美術館賞」が授与され、賞状と副賞が贈られました。また、選抜作品は女子美術大学美術館に収蔵されます。

『眼差し』　角谷琴音
芸術学部美術学科立体アート専攻

2022年度 特別賞

順天堂
佐藤志津・小川秀興賞

学校法人順天堂と本学は連携・協力に関する協定を締結しており、その一環として2016年度より優秀な卒業制作に対して「佐藤志津・小川秀興賞」を授与いただいております。本年度は以下の学生が受賞し、賞状と副賞が贈られました。選出された作品は順天堂大学内に1年間展示されます。

『うみべ』　楠本みのり
芸術学部美術学科洋画専攻（絵画）

『なくしもののくらし』　井上璃乃
芸術学部美術学科洋画専攻（版画）

東京理科大学賞

学校法人東京理科大学と本学は連携・協力に関する協定を締結しており、その一環として2015年度より優秀な卒業制作に対して「東京理科大学賞」を授与いただいております。本年度は以下の学生が受賞し、賞状と副賞が贈られました。選出された作品は東京理科大学内に1年間展示されます。

東京理科大学
学長賞

『永遠』　月井鈴菜
芸術学部美術学科洋画専攻（絵画）

東京理科大学
坊っちゃん賞

『真面目』　山崎夏苗
芸術学部美術学科洋画専攻（版画）

東京理科大学
マドンナ賞

『海の回想』　森本美乃里
芸術学部美術学科日本画専攻

展覧会報告

JAM

2022年度 女子美術大学退職教員記念展
2023.1.11(水) – 1.26(木)
川口吾妻、南島隆、吉田潤一郎
2022年度退職される女子美術大学芸術学部実技系教員の展覧会。ガレリアニケからの巡回展でした。

2022年度 女子美術大学大学院博士前期課程修了制作作品展
2023.3.10(金) – 3.15(水)
2022年度に本学大学院美術研究科を修了する学生が制作した修了制作作品の展覧会。相模原キャンパス（女子美アートミュージアム）では、洋画、日本画、版画、工芸（陶・ガラス・刺繍）、立体芸術、ヴィジュアルデザイン、環境デザインの領域を専攻した学生の作品を紹介しました。オンライン同時開催。

2022年度 女子美術大学大学院博士後期課程研究作品発表会 ―瞬間的な接触―　伊藤夏実
2023.2.13(月) – 2.18(土)
2022年度 女子美術大学大学院博士後期課程美術研究領域（洋画）伊藤夏実の学位申請に係る研究作品発表会を開催しました。

【学内展】女子美の先達たちと女子美染織コレクション展
2023.4.5(水) – 4.27(木)
新入生や在学生に向けてJAMコレクション・女子美染織コレクションの作品やポスターにて施設の紹介を兼ねた展覧会を開催しました。

女子美ガレリアニケ

2022年度 女子美術大学退職教員記念展
2022.11.29(火) – 12.17(土)
川口吾妻、南島隆、吉田潤一郎
2022年度退職される女子美術大学芸術学部実技系教員の展覧会。女子美アートミュージアムへ巡回しました。

2022年度 女子美術大学大学院博士前期課程修了制作作品展
2023.3.10(金) – 3.15(水)
2022年度に本学大学院美術研究科を修了する学生が制作した修了制作作品の展覧会。杉並キャンパス（女子美ガレリアニケ）ではメディア、ヒーリング、ファッションテキスタイルの領域を専攻した学生の作品を紹介しました。オンライン同時開催。

JOSHIBI AP Graduate & Degree Show 2022
2023.1.13(金) – 1.24(火)
アート・デザイン表現学科アートプロデュース表現領域4年生による卒業制作作品を展示しました。

【学内展】女子美ガレリアニケってどんなところ? ―企画展示の記録と展示室紹介―
2023.4.5(水) – 4.20(木)
新入生や在学生に向けて過去企画展のポスターや会場動画を展示し、施設の紹介をしました。

歴史資料展示室

2022年度収蔵資料展　収蔵資料にみる女子美の歩み　女子美生らいふ!
2022.9.12(月) – 2023.3.17(金)　1900年代～1945年頃の、女子美生の生活を収蔵資料とともに、当時の学生のエピソードを交えながら紹介しました。

展覧会予告

JAM

女子美術大学美術館コレクション展　蒐(あつ)める／表す ―溝田コトヱコレクション
2023.5.24(水) – 7.29(土)
本学名誉教授で元洋画専攻教授の溝田コトヱが収集した絵画・版画・彫刻などを紹介する展覧会です。

2023年度 女子美術大学退職教員記念展
2024.1.10(水) – 1.27(土)
2023年度に本学を定年退職される実技系教員による展覧会です。

2023年度 女子美術大学大学院博士前期課程修了制作作品展
2024.3.9(土) – 3.16(土)　＊2024.3.9(土)～3.16(土)　＊3.13(水)、14(木)休館
2023年度に大学院博士前期課程を修了する学生作品を展示します。

女子美染織コレクション展PartⅡ　アンデスの染織
前期展示 2023.9.13(水) – 10.7(土)　後期展示 11.1(水) – 12.9(土)
女子美染織コレクションが有するアンデスの染織品を前期後期に分けて展覧します。高度な織物技術により創出された色彩豊かでユニークなデザインの染織品をご紹介します。

第43回 造形「さがみ風っ子展」
2023.10.20(金) – 10.22(日)
相模原市内小中学生の造形作品展です。

2023年度 女子美術大学大学院博士後期課程研究作品発表会
2024.2.13(火) – 2.19(月)
※開催は学位の申請状況により変更があります。

女子美ガレリアニケ

ニケキュレーターズセレクション#07奥村巴菜展-虫めづる視点-
2023.5.12(金) – 6.15(木)
本学卒業の若手アーティストを紹介する展示。本年は、奥村巴菜の作品をご紹介します。

女子美スピリッツ2023　松﨑笙子展
2023.10.5(木) – 10.24(火)　＊会期中無休
本学卒業生で名誉教授の松﨑笙子の既成概念に囚われず遊び心のあるテキスタイル（浴衣・手ぬぐい）をご紹介します。

2023年度 女子美術大学退職教員記念展
2023.12.1(金) – 12.20(水)
2023年度に本学を定年退職される実技系教員による展覧会です。

女子美術大学短期大学部1年前期「基礎造形2023」展
2023.7.12(水) – 7.27(木)
短期大学部1年生が自由選択授業で制作した学生作品を展示します。

遠山香苗展ー音と絵の往復書簡よりー
2023.10.30(月) – 11.17(金)
本学付属高等学校・中学校の美術科教諭による展覧会です。

JOSHIBI AP Graduate & Degree Show 2023
2024.1.12(金) – 1.24(水)
アート・デザイン表現学科アートプロデュース表現領域4年生・大学院生による卒業・修了制作の作品を紹介します。

2023年度 女子美術大学大学院博士前期課程修了制作作品展
2024.3.9(土) – 3.16(土)　＊3.13(水)、14(木)休館　2023年度に大学院博士前期課程を修了する学生作品を展示します。

歴史資料展示室

女子美術大学所蔵　藤田文蔵作品展　2023.4.5(水) – 7.15(土)　＊休室日　火・日・祝日
女子美の創立者の一人、初代校長で彫刻家の藤田文蔵作品等を展示公開し、その生涯と功績をご紹介します。

展覧会報告　PICK UP

2022年度 女子美術大学退職教員記念展

2022.11.29(火) – 12.17(土)
杉並キャンパス（女子美ガレリアニケ・110周年記念ホール）

2023.1.11(水) – 1.26(木)
相模原キャンパス（女子美アートミュージアム）

2022年度 女子美術大学退職教員記念展では、本学芸術学部 デザイン・工芸学科 工芸専攻教授の吉田潤一郎先生、アート・デザイン表現学科 メディア表現領域教授の川口吾妻先生、同学科 アートプロデュース表現領域教授の南島隆先生、3名の実技系教員による作品展覧会を杉並・相模原キャンパス両校地の巡回展形式にて開催しました。

吉田潤一郎先生の陶芸作品の数々は、初期の頃の実験的な作品から近年取り組んできた大皿まで、美術館のロビーから見える景観に映えて自然と調和した美しい空間となりました。
川口吾妻先生は、自身が開発に携わったアプリやセンサーにより展示室内の壁面に投影された画像に触れることで映像が変化する参加型の作品などを通じてメディアアートの可能性を示唆してくれました。
南島隆先生は、制作活動の親交を温めたジョージア国をテーマにした作品など、学生時代の作品からはじまり制作活動の集大成となった会場は、多数の彫刻とそれらに通底する世界観に圧倒される展示となりました。

長きにわたり教鞭をとり、後進の育成に携わるとともに、作家として創作活動に取り組んできた3名の先生方の幅広い活動の軌跡をご覧いただくことにより、本学の教育方針へのご理解がより一層深まる機会となりました。

吉田潤一郎先生 会場風景　撮影:大原一晃

川口吾妻先生 会場風景　撮影:大原一晃

南島隆先生 会場風景

女子美術大学広報誌

発　　行　学校法人女子美術大学
〒166-8538
東京都杉並区和田1-49-8
企画・編集　総務企画部広報グループ
監修担当　佐藤真澄・松山智一
デザイン協力　株式会社 Kitchen Sink.
印　　刷　株式会社ヒーローズ
発 行 日　2023年6月20日

© 2023 学校法人女子美術大学

広報グループでは女子美のニュースを募集しています。お気軽に下記までお知らせください。また、本誌の定期購読をご希望の方はお送り先を広報グループまでご連絡ください。

広報グループ
TEL 042-778-6123
E-mail prs@venus.joshibi.jp
URL https://www.joshibi.ac.jp